

## 印象記

## 第46回米国核医学会印象記

細野 眞

埼玉医科大学総合医療センター 放射線医学教室

今年の米国核医学会SNMは6月6日から10日までロサンゼルスにて開催された。当埼玉医科大学総合医療センターから4演題採択され、町田喜久雄教授、清水裕次先生、細野の3名が出席した。

成田を発ってロサンゼルスに到着、Bonaventureホテルに着いたのは6月5日(土)の正午ごろであった。別便で2時間ほど早く着いていた清水先生と合流して昼食を取り、翌日からのスケジュールを打ち合わせた。

6月6日(日)は清水先生とカテゴリカルセミナーに間に合うよう朝早くから学会場に行った(図1)。学会場はダウンタウンにあるにも関わらず、驚くほど広大である。このようなものを街の中に建設するのは日本でもヨーロッパでも不可能である。朝一番のセッションに参加しようという人で登録受付が長蛇の列であった。列の中で京都大学の小西淳二先生とお会いしてお話させていただいた。SNMでは毎曜日曜日のカテゴリカルセミナーは非常に勉強になる。今回も町田先生に引率していただいて、清水先生とともに参加した。基礎、心臓、腫瘍、神経、核医学治療など多くのコースがあるが、登録してしまえば、どのコースも聴講できる。その分野で多くの業績があり、プレゼンテーションも熟練した講師の方々が初歩から最新の話題まで解説してくれるので価値が大きい。



図1 学会場

午後からは、ユーザーミーティングに出席した。Cytogen社は、Tc-99m標識モノクローナル抗体である前立腺癌の診断薬Prostascintが中心であった。演者のひとりの放射線科医がProstascintによる前立腺癌の病変の評価について熱っぽくしゃべり、「泌尿器科医たちがもうひとつProstascintに乗り気でないが、いいデータが出ているから、使ってもらえるようねばり強く説得しているよ」とファイトを見せていたのが印象的であった。Prostascintの検査結果について担当の泌尿器科医とまめに連絡を取っているとのことで、新しいものを導入して他科の医師に認めてもらうにはどの国でも熱意が必要なのだと改めて思った。

Diatide社のユーザーミーティングでは、ペプチドイメージング特に血栓の検出に用いるTc-99m標識ペプチドであるAcutectの話題であった。ペプチドイメージングは有望な分野で欧米ではOctreotideやAcutectが日常診療に用いられているが、日本ではなかなか進んでいないのが現状である。Nycomed Amersham社がAcutectに関わっているらしい様子であり、そのルートから日本へも導入していただきたいものである。

Immunomedics社のユーザーミーティングでは、フランス・ナントのChatal教授にお会いした。筆者は1994年から1995年にかけてChatal教授のもとへ留学して2ステップ法による抗体シンチグラフィや放射免疫治療の研究に携わった。東京大学放射線科の奥 真也先生ともナントで一緒に仕事をした。Chatal教授はImmunomedics社のGoldenberg教授と共同研究されており、2ステップ法による抗体シンチグラフィや放射免疫治療の臨床応用をフランスと合衆国で進めているのである。Chatal教授のご紹介でGoldenberg教授とお話したところ、日本でのパートナー探し(大学や製薬会社)にご興味があるようであった。

6月7日(月)はSNMのブースに立ち寄って米国核医学会雑誌JNMの査読者に対する記念品のボールペン



図2 向かって右から町田教授、清水先生、筆者



図3 レストランTesoro Trattoriaにて  
向かって右から玉木教授、筆者、鳥塚夫人

を受け取った。これはカリフォルニアの空のような鮮やかな青の外見であった。そのあと骨転移の疼痛緩和に関する教育講演を聞いた。合衆国でSr-89、Sm-153が認可されて用いられている。さらに内部転換電子のエネルギーの低いSn-117mが骨髄抑制の低い点で今後有望のようであった。夕方は町田先生のお供をさせていただき(図2)関東地区の先生方とレストランCicadaで夕食をいただいた。映画の撮影にも使われたという格式高いレストランである。

6月8日(火)は朝8時から清水先生のポスターの発表であった。清水先生はSNMは初めてであるが、立派に質問者に応対されていた。この夕方はSNM President Receptionに放医研の棚田修二先生ご夫妻、慶應大学の中村佳代子先生とともに参加した。場所は前日と同じレストランCicada。しかし、前日とは別の角度から見てもなかなか重厚でしかも瀟洒な内

装であることが見て取れた。ReceptionにはSNMやヨーロッパの先生方が大勢いらっしゃった。会長の挨拶などではなく、いつの間にか始まり、バンドが演奏する中、出席者同士歓談しざわめいている。Henry N. Wagner先生がいらっしゃる。かつて棚田先生は京都大学から派遣されHenry N. Wagner先生のもとで学ばれたので、久しぶりの再会とあって、親しくお話になっていた。筆者はしばらく中村先生と料理を味わっていると、Wagner先生ご夫妻が我々のテーブルにおいでになって、座ってよいか、とおっしゃって、かなり長時間歓談することができた。核医学の分野では世界中誰でも知っているcelebrityにもかかわらず、たいへん気さくなかたでいろいろお話していただき、感銘を受けた。もっと居たかったのだが、この夕方はもうひとつ予定があった。近代美術館MOCA近くのレストランTesoro Trattoriaで開かれた食事会に出たところ、京都の鳥塚莞爾先生ご夫妻、小西淳二先生、北海道の玉木長良先生、浜松の阪原晴海先生、PittsburghのTauxe先生をはじめ多くの先生がたがいらっしゃった(図3)。Tauxe先生はたいへんな日本びいきで日本に長期滞在なさったこともある。2時間ちかくいろいろなお話を楽しませていただいた。Pittsburghは世界有数の移植医療のセンターであるので臓器移植の話になって運転免許証に臓器提供の意思の有無を記載することになっているよ、とご自分の運転免許証を見せてくださった。

6月9日(水)午前には筆者のポスター発表があった(図4)。お隣で京都大学の田中富美子先生が発表されていた。

学会の合間に清水先生とロサンゼルス郊外BrentwoodにあるGetty Centerに行ってみた。ホテル



図4 筆者 右手にしているのはJNMの記念品のボールペン

からタクシーで30ドルくらいである。石油で大富豪となったPaul Gettyの名のついたセンターで1997年12月に現在の場所に移ってきたばかり。美術館、研究所、教育機関が丘の広大な敷地の中にあり、レストランや散策できる庭園も併設されている。今ロサンゼルスで話題のスポットである。美術館は有名なゴッホのアイリスの絵の一つを所有している。今回はたまたま他の美術館へ貸し出し中ではあったが、他のコレクションも素晴らしかった。入場無料であり、大富豪が社会に富を還元しているということなのであろう。センターの建築物そのものも美しい(図5)。丘からダウンタウンまで見晴らすことができ、眺望が見事である(図6)。家族連れを含め大勢の人がくつろいでいた。

さて学会場では出版物販売のコーナーも重要である。核医学診療関係の図書とともに放射線防護の図書もいくつか購入した。特にSNMがNRC(National Regulatory Commission)の放射線に関する法令のハンドブックを出しているのがきわめて有用である。



図5 Getty Center

NRCの法令は実に合理的である。日本国内でも現在監督官庁や諸学会が協調して放射線防護に関する法令の改正を検討しており、NRCの法令は参考になる点が多い。

今回あらためて欧米で核医学が日進月歩に伸びている様子を感じた。とりわけ抗体やペプチドの応用や核医学治療の面では彼我の差は大きくなっているように思われる。またSNMの教育プログラムへの注力にはいつもながら感心させられた。

最後にご指導賜りSNMに導いていただいた町田先生、本田憲業先生、学会出張中の診療業務を代行していただいた高橋卓先生、高橋健夫先生、鹿島田明夫先生、長田久人先生、出井進也先生をはじめ医局の先生方、ロサンゼルスでお世話になった数多くの方々にお礼を申し上げる。



図6 Getty Centerにて清水先生